

私が本当の意味での看護師を目指したきっかけは、多くの犠牲をだした東日本大震災である。

昨年三月八日、私は四月から准看護学校に通う為に東京から実家の福島県に帰ってきた。新しい生活に期待と不安を募らせながら日々を過ごしていた。

三月十一日、天変地異とはまさにこの事だと思った。地震が起こり、急いでテレビを付ける。名取市の津波の映像が流れる。恐怖で涙が流れる。町が飲み込まれていく。土砂に家ごと潰される。建物が燃えている。親族の安否が確認できない人々。確認できたがもう亡くなっていた人々。負傷した人々。胸をえぐられるような映像を家族で一晩中見ながら全員でこたつで眠りについた。

翌日信じられないニュースが流れた。福島第一原発が爆発している。私はなんでこのタイミングで福島県に戻ってきてしまったのだろう、入学を取り消して東京に戻りたい、と強く思った。そんな気持ちの時、双葉厚生病院のニュースを見た。双葉厚生病院は福島第一原発から約四キロメートルの距離に位置しており、原発爆発後も多くの患者様、職員が取り残されている。今もなお救援活動は続いている。私は母を心配した。私の母は市内の病院で准看護師として働いている。もしまた大きな地震が来て病院の患者様、職員全員が避難しなければならなくなった時、母はきっと家族より患者様の避難を優先しなければならない。嫌だ。嫌だ。逃げて欲しい。死んで欲しくない。自分の命を優先して…。

その晩母にその事を伝えた。母は、

「心配してくれて有難う。そのニュースは病院でも話題になっていたよ。あなたはまだ学校で何も学んでいないからそう思っても仕方がないのかもしれない。けれど看護師を志す者としてその考えは正しくはないよ。自分が看護師になった時、今回のニュースの様な状況になったらどうすべきか考えながら学んでいきな。解るようになるから。」

この時はなんで私が心配している事を解ってくれないのか、と怒りさえ込み上げてきたが、今、もうすぐ一年次を終える私の考えは一年前と全く違う物になった。

まず、このタイミングで看護師を志し、福島県に戻ってきた事を誇りに思う。看護学を学ぶにつれ、自分は役に立てるという喜び、そして使命感さえ感じている。看護者の倫理綱領にもある通り、「看護者は、対象となる人々の看護が阻害されている時や危険にさらされている時は人々を保護し安全を確保する」とある。そして私達はそれの本当の意味を東日本大震災を通して学んでいる。東日本大震災は私達に深い傷を残した。その傷を少しでも私達の手でケアしていくのが悲しみを知っている私達の役割なのだと思う。